

第1部 文の組み立て

1. 主語



1) 主語とは何か

誤解されがちですが、主語とは「^{おも}主な語」「^{しゅ}主たる語」ではありません。「^{ぬし}主となる語」です。主語がその文を**支配**する、ということです。主語がないと始まらない、ということが納得できるかと思います。

主語とはずばり、「その文の**主体**になるもの」をいいます。「主体」とは、「みずから（考えて）動くもの」のこと。つまり、1つの文の中で「主体性を持つもの」がなんらかの作用を及ぼし、ほかのものに働きかける。これが「主語」なのです。

具体的に見てみましょう。日本語の主語は「～は」「～が」で表されます。

- 私はテレビを見る。 → 「私」が主語
- 彼が歌っている。 → 「彼」が主語

いずれも、「テレビを見る」のは「私」、「歌っている」のは「彼」という「主体」ですね。

ところが、すべての「～は」「～が」が主語になるわけではありません。

- 私は機嫌がよい。 → 「私」と「機嫌」が主語？
- 今日は天気がよい。 → 「今日」と「天気」が主語？
- 私は山が見える。 → 「私」と「山」が主語？
- 彼は彼女が好きだ。 → 「彼」と「彼女」が主語？

ここで日本語論を展開するつもりはありませんが、「～は」には「話題の提供」や「語句の強調」、「～が」には「好意などの対象」の意味もあり、必ずしも主語になるわけではないこと、日本語文の「～は」「～が」を自動的に英文の主語としてはならないことを、頭の隅に入れておいてください。

なお、日本語の会話で「主語を言え！」などと言われることがあるかと思いますが、これはもちろん、「主体」としての主語ではなく、「話題の中心」＝「主題」のことですね。

2) 主語の役割

主語は、その文の「顔」になります。顔がなければ、手も足も体もつけられません。その意味で、英文には必要不可欠の要素です。

主語は「文の主体」を表すのでしたね。つまり、主語があることによって「文の担い手」が規定され、**動作や作用の出発点**がわかる、というしくみになっています。

- ▶ I watch TV. 私はテレビを見る。
[I] → 「watch TV」 「私」 → 「テレビを見る」
- ▶ He is singing. 彼が歌っている。
[he] → 「is singing」 「彼」 → 「歌っている」

一方、日本語では**主語の省略**がよく行われます。

○ もう終わったよ。

このように言われても、「何が」終わったのか、あるいは「だれが」終わったのかということは、たいていの場合わかりません。それは、主語を**文脈から判断**しているからです。

英語で主語を省略することは、まずありません。ために主語を省いてみると、

- ▶ Watch TV. テレビを見なさい。
- ▶ Is singing. (×意味不明)

のように、命令文になってしまったり、意味が通らない不完全な文になってしまったりします。逆にいうと、主語を文脈から判断できない構造になっているため、英語では主語を省略できないのです。

3) 主語の位置

最後に、主語の位置を確認しておきましょう。主語は文の「顔」なので、英語では**文の始め**に登場するのが通例です。

- ▶ I usually watch TV after dinner.
私はふつう夕食後にテレビを見ます。

副詞句などで文を始める場合でも、その直後に主語が置かれて、それを出発点に完全な文が続きます（文頭の副詞句がなくても文は成り立ち、その文の先頭に主語があることになります）。

- ▶ *After dinner*, I usually watch TV.
夕食後、私はふつうテレビを見ます。

日本語では、文中での主語の位置は自由ですね。

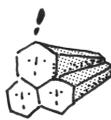
- ふつう私は夕食後にテレビを見ます。
- ふつう夕食後に私はテレビを見ます。

▶ 今回のまとめ

- 1) 主語は文の「主体」を表す
- 2) 英語では主語を省略できず、位置は文頭に固定される

視野を
広げて

各国語の「主語」事情



英語では主語が省略できず、位置は文頭に固定。それに対し、日本語では主語が省略できて、位置も自由。ずいぶんと対照的ですが、ほかのヨーロッパ語ではどうなのでしょう。

	主語の有無	主語の位置
ラテン語	× 不要	× 自由
ギリシア語	× 不要	△ 比較的自由
ロシア語	× 不要	× 自由
イタリア語	× 不要	△ 比較的自由
スペイン語	× 不要	△ 比較的自由
フランス語	○ 必要	○ 固定
ドイツ語	○ 必要	△ 比較的自由
英語	○ 必要	○ 固定
日本語	× 不要	× 自由

※ 網掛けは本書で詳しく取り上げる言語です。

こうして比べてみると、意外なことがわかります。主語が必要不可欠で位置も固定されている英語が、(この中では)少数派だったのです。驚いた人もいないのではないのでしょうか。

もともとラテン語では、主語は強調する場合にのみ添える

もので、位置も文中のどこに置いてもよく、まったく自由でした(ラテン語では、動詞の位置でさえも自由です)。その原則はギリシア語やロシア語でも同じで、ラテン語から発展したイタリア語やスペイン語にも受け継がれています。

その一方で、フランス語やドイツ語では主語を省略できず、フランス語にいたっては位置も固定されています(フランス語もラテン語を祖先に持つので、この点は不思議なのですが)。

「ヨーロッパ語には主語が必要だ」という認識が一般的になっているとすれば、それはきっと、日本で比較的勉強されている英語・フランス語・ドイツ語が、たまたま主語を省略できない言語だったからなのでしょう。そうではなく、主語を必要としない言語のほうが多いのだ、英語のほうが特殊なのだ、と思っていたほうが、言語の世界を正しくとらえていることになるのかもしれませんが。